

---

# 青空の下に

bluewind

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青空の下に

### 【著者名】

N4069C

### 【作者名】

bluewind

### 【あらすじ】

広い紺碧の空の中に、輝く太陽一つ、その下に一人。三度、夏が通り過ぎていった。まだ、この暑い空の下に、立ち続けている。（現在停止中）（現在連載中の【金色の花】終了後か、それとももう少し文章表現力が身についてから、再度チャレンジ、改めて一から書き直そうかと考えています）

「ハア……ハア……」

角を曲がって電信柱を……1、2、3、4つ！

タンと両足で着地して、ようやくお兄ちゃんの家に到着しました。自分の家を出た時はまだ少し空が明るくて蒼かったのに、今はもうすっかり黒く染まつて、砂糖をこぼしたような沢山の星の粒たちが、キラキラと綺麗に輝いています。

両膝に手を置いて、一呼吸、そして額や頬の汗を、手や服の袖でしつかり拭いました。少しでも汗とかが付いていると格好悪いです。そしてようやく息も汗も落ちてきて、爪先立ちで背伸び、ピンと伸ばした人差し指で、ちょっと高いチャイムのボタンを押しました。

「お兄ちゃん、来たよ」一緒に扉に向ひ声も掛けました。すると田の前の玄関の薄いガラスの方からすぐに「ああ、コウ、待つてろよ、今、靴、履いてるよ」と声が返ってきました。コウは家の門のところに背を預けて、ブランブラン足を上げて揺らしながら、笑みを隠せないといった様子の顔。

やがて、玄関が開くと、お兄ちゃん……と、その後ろから大きな声で「あんまり遅くならないようにねーあと、ユウちゃんを危険なところに連れて行くんじゃないよー」、これはお兄ちゃんのお母さんの声。

「わかつてゐよーじゃあ行つてくるよー」負けずにお兄ちゃんも怒鳴り声で言い返して、ピシャリとドアを開けないとわんぱかに勢よく扉を閉めました。

「お待たせ、行こつか」

「ウン」

コウは肘で背中の門を押して、飛び出すよつこじて出発しました。

「ン～ンンン～ンンシ～ン～ンン～」コウは変な鼻歌を歌いながら、スキップで跳ねて、随分と「機嫌です。さて、少し後ろを振り返つてみれば、お兄ちゃんは口に手を当ててあくびをしたり、首を捻つたり、何だかとても疲れてこるようです。

「どうしたのお兄ちゃん?」

「ああ、こことのどりはずっと朝と晝が逆転の生活で……」

「で?」

「お前のためだよ……どうしても夜、湖に連れてって欲しいなんていうから」

「変な時間に寝てるお兄ちゃんが悪いんだよ」

「いや、ウン……まあそうだけど。しかし、おまえ、凄く」機嫌なのな

「な

「え?」

とぼけて不思議そうに、大きな丸い目を大きく開けた顔をしましたが、緩んだ口元の笑みは隠せません。

「だつて、本当に凄いんだよ!」

「フーン、あんまり夜にあの湖に行つたことないからなあ……」

「あたしはお母さんと……コウズズミ? 行つた時に初めて見たんだけどね、とにかく本当に星でいっぱいで凄いの! 本当に宇宙みたいに! お兄ちゃん、カメラは持ってきたよね?」

「ああ、使い捨てカメラだけど、コレ使い切っちゃわないといけないから」

「なんだ、あの格好良い大きいカメラじゃないんだ」

「使い捨てだつて十分綺麗だよ」

「お兄ちゃんの腕じやあ、どっちにしたつて変わりないか……なん

て

「オイ」

街灯の点々と続く頼りない光を頼りに、暗い夜道を一人で楽しげに話をしながら歩いていると、すぐに湖の前の坂道へとたどり着きました。緩やかな坂を、お兄ちゃんはノソリノソリと、コウはもど

かしくて先に少し駆け足で登つていきました。やがてコウは坂を上り切ると、「ワッ！ ワッ！ お兄ちゃん～早く～！」、ピーンピヨンと小さく飛び跳ねて、両手を振つて呼びました。

「待つてくれ……本当に体がだるいんだよ……昨日の夜からほとんど丸一日寝てないんだから……」と、愚痴をこぼしこぼし、年を召した老人のように背中を曲げて、足を引きずりながらゆっくり歩いていましたが、やがてようやく登りきって、コウの指差す方を見るとな……その光景にすっかり田を奪われ、ポカンと口を開けそうに小さく開けました。

「オイ、これは……本当に凄いな

「でしょ！ でしょ！」

そこに生まれた『宇宙』がありました。

一人は湖の端の少し高くなつたところから湖を見下ろしていますが、田舎の自然の湖なので、辺りには人家は無く、余計な光は一切ありません。そう、天空の無数の星たちを除いて。

湖の向こうには背の低い山があるのですが、暗闇で全く空の闇と溶け込んでいます。空と地上の境が無く、上も下も同じ真つ黒、一色の世界です。そこに、空に浮いている星たちと、その星の光が反射している……湖の表面にも同じ無数の星たちがいて、上も下も星屑だらけ。田の前にあるはずの、山が、ほどりが、黒く姿を消して、ただ星の瞬きだけがそこら中にぱぱい、田も眩むほどに沢山見えるばかりなのです。

「すげえ」、お兄ちゃんはまた感想ともいえない言葉を呟くばかりです。

「ねえねえ、ちょっと来てよ。あたし考えたんだ、凄いこと」

コウはそういって、湖の水辺の方へと続いている坂を、駆け足で下りていきました。

「ちょっと待て！ 僕は監督責任があるんだよ……」、お兄ちゃん

は慌ててユウの後を追つて駆け下りました。少し眉根を曲げて困った顔をしながらも、目の前の光景が信じられないといった風で、疲れもどこかに飛んでしまったようこ、田や口はもう柔らかな笑顔です。

## 02・宇宙を飛ぶ

下まで降りて、コウはどこに行つたとあひつけ皿を流すと……コウが宙に浮いています。

「ハツ……」

コウの頭のずっと上方に星、コウの下の足元の方にも……星。星空に囲まれて、空を飛んでいます。

しかし、少しコウの方に近付いたら、すぐに分かりました。コウは桟橋の上に立っていたのです。木の桟橋は随分と古くてボロボロで、きっと水アカのせいでしょう、表面が黒く変色し、やはりこれも闇に溶けて見えなかつたのです。湖の中に突き出た黒い桟橋の先に、コウが立つていたのです。

「空を飛んでるみたいに見えない？」

そう言つてコウは嬉しそうにはしゃいで、その場でクルクルと回つたり、片足でつま先で立つたり、踊り出しました。右に左にステップを踏めば星々の間を軽やかに飛んで渡り歩くよう……手のひらを上に向けて掲げれば星粒をその手に受けて掴んでいるようです。コウは決して踊りは上手くなく、時々踏み足を違えてよろめいたり、手の動きが変だつたり、でもとても楽しそうに……段々と動きが激しく大胆になつていきました。

ハツと気付きました。そして手で口の前に筒を作つて叫ぼうとした時、コウの姿が黒い宇宙の底に吸い込まれました。コウがいたのは、真っ暗でよく見えない、水垢で滑る桟橋の上でした。

「コウ！」、言葉と体は、無意識のうちに動きました。自分で下手に落ちないよつとに、僅かな星の光を頼りに、滑らないようにひと踏みひと踏みしつかり踏みしめながら、桟橋の端までひた走り、そのまま飛び出して『宇宙』の中へと飛び込みました。

黒い空間が激しく歪み、波が大きく立ちました。ブクブクと泡が無数に立ち、どっちが上でどっちが下なのか……方向感覚が全く無

## くなる黒い宇宙空間。

コウの記憶の隅に微かに、腕に、宇宙の冷たさとは違ひ温かさを感じたのを覚えていたばかりでした。

### 03：闇から光へ、光から闇へ

真つ暗で、息が苦しい。ここには空気が無い。何も無い。美しい星たちが煌々と優しく瞬いているのに、そこへ行くと何故こんなに苦しいの？

やがて星の光は薄れ消えていき、本当の暗黒。暗闇の何も無い怖さ。そして、闇はまた、白く薄らいでいて、まぶた一つ離れてた先の、光の存在。急に湧き上がつてくる心からの安息。

コウは、ベッドの上で眠っている自分の姿に氣付きました。

「気が付いたか？」

誰かの声のした方を向くと、そこにはコウのお父さんとお母さんでした。

「…………？」

コウは不思議そうに首を傾げたら、ズキンと頭が酷く痛みました。何か聞こうと話しかけようとした言葉も引っ込んでしまったほど。痛みです。

「大丈夫か、落ち着きなさい」、お父さんがそっと優しく頭を撫でてくれました。

「意識が戻れば心配は無いでしょう」、両親の後ろに控えていたらしい、背の高い看護婦のお姉さんが厳かに言いました。

「では、何かありましたら、ホールを押してご連絡下さい」

「はい、ありがとうございます」

そして看護婦のお姉さんは部屋を……田も痛いほど白い部屋の扉を開けて出て行きました。

「あの看護婦さん、昨日の夜、一日お前を見ていて下をつたんだよ。退院する時にはお礼を言わなくちゃね」お母さんはそう言って、何か足元の辺りをガサゴソと探りました。一個の赤いリングを取ったのでした。

「病院？」

「コウはもう聞くまでもないと思いましたが、一応、訊ねてみるとこ

とにしました。

「ああ、覚えているか？　お前が湖で倒れているのを見つけてくれた人がいてな、その人が病院に連れてきてくれたんだよ」

「湖……」

段々と、暗くて曖昧だった記憶が、断片で一つ一つくみ上げられていくて、それが一つの積み木の形のように、確かに記憶へと組み上がっていきます。夜、星空、湖、宇宙、水、……。

「（溺れたんだ）」ようやくそこまでの記憶がよみがえりました。桟橋で踊つて、浮かれていて、足が急に滑つて、何の手応えもなくなつて、冷たい水の中に落ちて……。

「あ、お兄ちゃんだ、お兄ちゃんが助けてくれたんだ」

微かに覚えている、腕に感じた温かさ。あれは右手の手首……そつと左手で撫でてみました。少し痛みが走りました。布団の中を覗いて、見てみると、そこは赤くなつていました。よっぽど強く握つて、引っ張つてくれたのでしき。

「ねえ、お兄ちゃんは？」、コウは赤い右手を布団から出して、両親に見せました。

「これ見てよ、お兄ちゃん力任せに引っ張つたんだね。こんな赤くなつて……ヒドイよね」、コウはむじろ冗談のように笑つて軽く手を振りました。

しかし……お父さんお母さんの顔が下を向いて……顔色も暗くなりました。

「お兄ちゃんが病院に連れてきてくれたんだよ？」

「何も……言いません。こっちを見ようとさえしません。

「…………」

「コウ、「お父さんはキッと顔を上げ、真面目な硬い表情でコウを見ました。

コウも、もう顔から笑みは消えています。お父さんの顔から、決

して誤魔化したりふさけて聞いてはいけないというのがはっきりと伝わりました。お母さんは、顔を伏せて、膝の上で手と手を重ねて撫でています、落ち着かない心をなだめ静めるよう。

お父さんの口が、まるで腹話術の人形のように、カクカクと機械のように動いています。そこから発した何かの言葉は、耳が急激に遠くなつていくように、段々はつきりと聞こえなくなつてきます。最初の一言一言で、お父さんの言おうとしていることが、それで十分に分かりました。もう、聞きたくありません。お兄ちゃんのことは……もういないのだから。

涙というのがこんなに熱いものなんだ、初めて知りました。言葉も出ないほどの胸の苦しみを、初めて知りました。

親しい人を失う気持ちの辛さを、初めて知りました。

腫れた右腕から、全てが現実であることを知らしめるように、絶えず痛みを伝えてきます。初め跡を見た時より、ずっとずっと痛みが増してきているようです。しかし、顔の涙は、決してその痛みによるものではありません。

ふと目の前に影が被さりました。小さく華奢な胸が、コウの顔に当たられました。お母さんの腕の中、コウは決して目を瞑ることはしませんでした、できませんでした。涙はとめどなく、母の服の裾を濡らしていました。涙と鼻水で顔が汚れしていくことを、何も構いませんでした。

コウはたまらなくなつて、体を全て預けるように、お母さんのお腹にしがみついて、声を立て泣きました。少しでも周りの病室に声が漏れないようにと、お母さんの服に口を当てる。……

夏だというのに、異様に冷たく寒い、黒い虚無の世界。辺りをひと搔きする度に、指先は痺れを感じるよし、痛い。こんなに怖く、こんなに寂しい、何も無い世界。だが、この先に必ず、居る。

しゃにむに手を振り回して、その指先に当たる偶然だけを期待する。視界は全く無い。あっちに振るつては、硬い感触、こっちに振るつては、柔らかい感触。それぞれに触れては一喜一憂。桟橋の垂直の足だつたり、これは藻か、水草か。その度に心臓が強く猛り、その度に息が苦しくなっていく。

任せられた以上、必ず助けてやらなければと、母親にこいつ酷く叱られる。一念しなければ、気が持たない。

どこに、どこに、この暗闇の一体、どこに。一度、上にあがつて息を吸おうか。

そう思い始めた、その瞬間、また微かに指先に感触。こっちか。体を乗り出して、腕を突つ込む。伸ばした指先に当たり、突き指。柔らかくもしつかりした存在感、肌の感触。間違いない。大きく手のひらを開いて、両手で腕をわしづかみ。でも華奢な体、あくまで優しく。

泳げ！ 水面へ！ 急げ！

もう息はろくに持たない。しかしこの暗黒の世界の中、どちらが上のかまるで分からぬ。がむしゃらに泳いでいるうちに忘れてしまった。泡が漏れた、斜め上へ昇つていく。こっちが上か。

段々と苦痛が、体中を支配していく。全身に、火炎が渦巻いていくように、熱い。手足が震えて、止まらない。まともに水を搔くことさえ、出来ない。全てを投げ捨てて、無茶苦茶に暴れたい。手を放しそうになるのを、無理矢理、手に力を込めて引っ張る。

あと、少し、あと、少し、あと、少し、水面に、出た、出た、押  
せ、押せ、押し出せ、ずっと、上に、押せ、力任せでも、強引でも、  
いけ、いけ、乗った、乗った？

乗った、乗った、乗った、……ツ　……ツ

。

窓の外が、ピカピカ光つているように眩しいです。梅雨は完全に過ぎ去り、もう本格的な真夏の刺すような光です。山の向こうの奥に、巨大な入道雲が隠れるようにひそんでいて、空にはただ太陽が一つ、たくましく力強く輝いています。

車の中に光は一切無く、ただ物憂げにクーラーの音が、沈黙の中に重々しい音色を引きずっています。助手席のお母さんは、時折、前のバックミラーをのぞいてみては、後ろの席に座るユウの様子を窺うのですが、ユウは右の奥の席に、隅に体を埋めるようにして、隠れようとしているようで、はつきりと見えません。

また窓の外に目を向けてみると、前方から農業トラクターが、ガタゴト騒音を立てながら、ゆっくりとすれ違いました。乗っていたおじいさんは、車の振動で揺れて麦わら帽子が落ちないようにと左手で押さえながら、右手で上手くハンドルを動かして、こちらの車の横を通り過ぎました。過ぎ去ってしまうと、あまりにやかまさに耳がおかしくなったのか、クーラーの音が消えてしまい、怖いくらいの静寂に包まれました。天使が通る、無言の時間。といつても、何か話すのは勿論、ラジオをかけるのも、テープをかけるのも、また窓を開けて風の音を入れるのも、ためらわれました。

ややあつて、運転をしていたお父さんがポツリと呟きました。「もう着くよ」

そしてハンドルを一気に切って、静かに湖の入り口のすぐ横の道路端に車を止めました。

お父さんはサッとシートベルトを素早く外すと、先に扉を開けて外に出ました。お母さんも出ようとしたり……ユウはまださつき見たときと同じ格好で、隙間に埋もれて固まっています。

「ユウ」

「…………」

「コウ」

「ん……ウン…………降りる」、抑揚の無い声。

外で、車を回り込んだお父さんが、コウのドアを開けてあげました。強烈な熱気がまとわりつくように迫ってきました。いきなり外の太陽の光をまともに浴びて、肌が、火で焼かれたかと思うような、ひりつく熱さを覚えました。ゆっくりと体を回して、熱く焼けたコンクリートの地面に降り立ちました。靴を通しても感じるほどの熱さ。

「アッ……」

コウの膝が笑い、降りた途端に体勢を崩して、よろめきました。すぐに近くにいたお父さんが肩を抱いてくれたおかげで、倒れずに済みました。

「大丈夫か？」、お父さんはしゃがみ込んで、下からコウの顔を見つめました。

「大丈夫、大丈夫」

コウは顔を見せないよう隠しながら、額き、手を振りました。そして立ち上がりつて、一人、先に湖の方へ、湖岸の坂道を下つていきました。

「行こう」、お父さんがお母さんに、促すように肩を押して、そしてコウの後ろに続きました。お母さんも下りていきました。

お父さんとお母さんが小声で話しながら降りてくると、コウは、桟橋の手前で立ち止まつていきました。胸の前で両手の指を交差させて、落ち着き無いように、体が少し震えています。お母さんがコウを抱きしめようと、近付こうとしました。

「怖い」

コウが、かすれた声で呟きました。

「これ以上、向こうに行きたくない。怖い」

そして、ペタリとその場に座り込んでしまいました。震えが、段々と大きく抑え切れなくなつていって……。

「コウ、コウチ」

その小さな頼りない背中を、覆い隠すようにお母さんの温かい体が、全てを包み込むよつこ、抱きしめました。

「ア……ウ……チ……」「……」

その場にいることは、とても残酷なことでした。田の前の黒い桟橋。考えたくなくとも、目の前に、あの夜の自分とお兄ちゃんの姿がある。ふざけて踊っている自分がいる。全てを忘れて踊り続ける自分を、今の自分がひつぱたくことは出来ない。落ちていく自分、そこへ飛び込んでいったお兄ちゃん。二つの影の映像が、何度も何度も、桟橋の上に現れでは、湖の中へと消えていく。消えていく。

「……チ……」「……」

「……」「……」

正午を過ぎ、太陽はさらりに光を強めてこそ、湖は蒼色をどんどん濃くしていきます。

滴る汗と涙に、コウは激しい眩暈を起しました。

「コウは気が付くと、車の後部座席に横になつて寝かせられていました。

車は走っているようでした。エンジンとクーラーの騒音。コウは一度目を瞑つて、しかしすぐにまた目を開きました。窓の外は、相変わらずの青空一色。ハケで丁寧に塗り潰されたような一面。窓枠がカンバスのように見え、ボウッと眺めていると、偶然に白い飛行機雲が、一枚絵を分割するように、やや斜めに、下から上へと白い線が引かれていきました。線は、車が進むと共に右へと流れていって、あたかも幕が引かれているようにも見えました。空の青さが、やや少しづつ黄色みを増してきたのです。

コウはムクリと体を起こしました。足を下におろして、座席に真っ直ぐに座りました。

「コウ、起きた？」

お母さんが助手席から振り向きました。

「熱射病だよ、お茶飲む？」

「ウン……ちよだい」

コウの喉はカラカラで、口の中が粘ついていました。お母さんは足元に置いてあつた水筒を取つて、一杯軽く注ぐと、こぼれないよう両手で添えて渡しました。

「ありがとう」、コウは一気に傾けて飲み干し、「もう一杯欲しい」とコップをすぐ返しました。

「コウ、先に家に帰るからな」、お父さんが、前を向いて運転しながら、コウに訊ねました。

「どうして？」

湖に行つた後は、お兄ちゃんの家へ向つ予定でした。

「お前は体、辛いだろ？」

「コウ、一旦家に帰るつね」、お母さんが合わせて頷きました。

「ウウン、行く」、コウははつきりとそれを言いました。

「コウ、倒れたんだから、無理は駄目よ。先に帰つて横になつてな

さい」

「ウウン、行きたい」

「コウはただ頑固にそう言つて、パイと窓の方へ目を向けました。空はさつきよりさらに赤みを増して、もう夕方の時間です。車は、村一番の大通りを通りついて、ここでは多少なりの交通量があります。

「コウ、ずっと眠つていたけど、やつて病院に寄つたのよ。熱射病で、静かに寝ているようについて。だから、帰るうね」

「だつて、あたしが行かないのは、駄目だと思つ」

「また今度行くようにすればいいじゃない」

「でも、お母さん、大切なことだから行かなくちゃ駄目つて言つてたでしょ」

「大丈夫よ、お兄ちゃんのお母さんには、ちやんと説明しておくれわ」「行く、絶対行くの」

頑とした態度に、お母さんはため息をついて、お父さんの方を見ました。お父さんは片手で頭を搔いて、「分かったよ、じゃあコウも行こい」としづしづ頷きました。

もう陽が全てスッポリ山の向こうに落ちてしまつた頃、コウたちの車はお兄ちゃんの家へと到着しました。もう家の近くの道端に数台の車が止まつていて、降りた皆は少しつつむき加減に口元を押さえたりして、お兄ちゃんの家へと入つていつてます。

コウらもその車の後ろに並んで停めて、外に出ました。お母さんは、コウの服に少しシワが出来ていたので、しゃがんで裾を引っ張つて正してあげました。そしてお父さんが先頭になつて、次にお母さんがコウの肩に手を優しくソッと置くと、コウは静々とお父さんの後ろに続き、そして最後にお母さんが後ろから見守るよつて、玄関をぐぐりました。

短い廊下を通り、右側の少し大きな部屋に入ると、部屋の中は、壁といつ壁、白と黒の縞に覆われて異様な雰囲気でした。部屋の真ん中に長く置かれたテーブルに座つた人たちは皆、場を埋め尽くすように黒い服を着込んでいて、その雰囲気にコウは少し怖氣づいたのか、オロオロと落ち着き無く辺りを見回しました。自分も両親に言われて、新しく買つた黒いワンピースを着せられたのですが、そこにいた皆や、部屋の様子が地味で重々しい格好をしていて、それはこれまで一度も見たことがないお兄ちゃんの家の様子で、まるで違う家に来てしまつたかのような変な感じで、落ち着かなくてしょうがありましたでした。

お父さんは、祭壇のすぐ近くのテーブルの前に座つていて、お兄ちゃんの両親の元へ向いました。

「コウ、行こつ」

お母さんに促されて、コウさとても苦じくて辛かつたのですが、心とは逆に足は自然と動くよつて、顔は下げたまま、お父さんの横に並びました。

「ああ、ユウちゃん、来てくれたの。ありがとう」

最初に、おばさんが声を掛けたのはユウでした。「ありがとう」

……どうして“ありがとう”なのか、想像できない言葉に、ユウは困って、顔を上げる機会を失ってしまいました。ユウは足元ばかり見つめていましたが、気配と音で、お父さんとお母さんが頭を下げたのが分かりました。

「ユウちゃんは無事で本当によかったです。もし何かあったら、あの子を殴りに地獄に行かなきゃならなかつたわ。本当に助かつてよかつた」

ユウは、お父さんとお母さんが、ありがとうございます。ありがとうございます。いりますと、お母さんは少し涙声で、何度も何度も言つているのを、どこかフワフワした気持ちで聞いていました。両親の声が、ずっと遠くから鳴り響いてくるように、ぼやけて聞こえます。ユウは段々と落ち着きを無くして、足の甲に足をのせて擦つたり、後ろ手で指を絡めたり……。

突然、田の前におばさんの顔が現れた時は本当にびっくりしました。

「ユウちゃん、おばさんからのお願いなんだけど、あの子のいる湖に、夏に一回でいいから、お花を添えてくれないかな」

ユウはジッとおばさんの田の中を覗きました。その田は少し赤くなっていましたが、赤くなく、むしろ優しげな光を持つて、ユウを見つめ返しています。

「ユウちゃんがお花を添えてくれたら、あの子はきっと嬉しこと想うのよ。あの湖にはあの子が……いるんだから」

「…………」

ユウは何も言えなく、ただ頷くだけ、精一杯の気持ちを込めて返事しました。

「ありがとう」

またおばさんをいつまでも、そしてお父さんお母さんともお辞儀しました。

またお母さんに引つ張られて行つて、テーブルにキッチンと正座して座りました。そして、式が始まりました。

式は全て滯り無く終りました。

焼香で、礼をして、摘んで入れて、手を合わせて……全てが空々しくて、奇妙でした。もうお兄ちゃんはどこにもいないのに、形ばかり、教えられたとおりに動かして。気付いてみればあつという間にお開きに。

帰りの車の中。ゴウの田にはもう涙はありませんでした。不思議と苦しみもありませんでした。ただ、少し胸の辺りに隙間が出来て、心が妙に軽いのです。それは勿論、軽やかな心地良さとは正反対です。妙に空疎で空しへ、まるでカラッポの宝箱のようですね。

小さく付けられたラジオが、静かに時節を伝えています。

「もうお盆を過ぎましたが、皆さんは海に遊びに行きましたでしょうか！？ 私はまだなんですよ～早く遊びに行きたい～。この頃になると海にはクラゲが沢山出るようになりますので、泳ぐ時は十分気をつけましょうね。昔、フトモモに沢山刺されてひどい田にありますよ～」

夏は、まだ続いています。

・中学生編

「ユウ、帰ろうよ」

「うん、少しだけ待つて」

もう黒板の文字の半分が消されてしまつて、残り半分、書けるだけと急いでペンを走らせて、ノートに書きとめていきます。しかしどりしても追い付かなく、最後の一行はあえなく記し切れず。

「あー……」

「 もう、ユウはノートに書くの遅いよ。また後であたしがノートを見せてあげるから、早く行こう!」

「ゴメンね、ヨシコ」

「謝るのも後でいいから早く!」

ユウは机のノートを鞄にしまつて、そのまますばやくヨシコに腕を掴まれて、引っ張られるように教室を出ました。

今日は学校の夏期講習の日でした。来年の高校受験を控えて、暑い夏の盛りに、三年生は学校に集まって、汗を流し流し、講義を受けていました。ユウと、友達のヨシコは、三年生ではじめて同じクラスになつたのですが、二人とも一緒に高校を受験するということでお互い聞き合ひ、勉強し合ひ仲良くなりました。  
「早く行かないと売り切れる!」

今日は町のアイスクリーム屋さんで、新作のアイスが発売された日でした。甘いものに田がないヨシコは、講習が終るのを今か今か待ちわびて、そして急いでユウを連れて向いました。

外は蒸すように暑く、アイスを食べるのにあつらえむきです。走れば余計に汗をかくのに、ヨシコはまるで気にせず突っ走っています。ユウはヨロヨロとついていくしかありませんでした。

しかし残念なことに、アイス屋につくと、もう新作は売り切れてしまっていました。

「あ～あ……だから学校の講習は嫌なんだよね……。町から遠いし、クーラー無いし、教える先生はオヤジばかりだし、話とか面白くないし」

ヨシコはよほどがっかりしてしまったようで、色々と愚痴をこぼし始めました。町の塾に行こうとしていたのを、学校の講習に出ようと言つたのはユウでした。

「ヨシコ、じつちのアイス食べようよ。ホラ、こないだ行つた時、売れ切れてたやつだよ」

「う～ん、そうだね。もう何でもいいや……暑過ぎる……」

二人はアイスを受け取ると、近くの街路樹に設置された、日陰のベンチに座りました。

暫く静かに、蝉の声を聞きながら食べていると、ユウはおもむろに話しえきました。

「ヨシコ、今日の数学の素因数分解、分かった？」

「何であたしに数学のこと聞くわけ」

「だってテスト、あたしより良いし」

「ユウの場合は、書くのが遅くて、回答が時間に間に合わないって感じただけじゃん」

「それは……確かにそんな感じだけど」

「とにかく数学なんてあたしに聞くのは間違ってるよ」

ヨシコは、最後のアイスのローンをひと口、放り込んで、手をはたきました。ユウはまだ半分くらい残つていました。

「あ、もしあれだったら先に帰つてもいいよ」

「いじつて、ゆっくり待つてあげるから。ていうか早く帰つたらお母さんに、勉強しろ、だもん。むしろ暑くともここでゆっくりした

い感じ」

「あ、でも、あたしあつと寄る所があるから」

「……どいい？ 彼氏？」

「ち、違う……」

「コウが首を激しく振った拍子で、手元のローンから、アイスがボトリー……と落ちてしまいました。

「あ……『メン』『メン』」

ヨシコはバツが悪くようすに眞面目に謝りました。以前にもそういう話をした時も、コウは本気になつて、声を荒げて慌てるので、軽い冗談でも言えないなと思うのですでした。

コウは、氣にしてないよとこいつようすに笑みを浮かべて、話を続けました。

「ちょっとね、お墓参りみたいなのをね、行こうと思つてて」

「あ、そなんだ」

「お花供えに行くんだ。暑いし、ヨシコは早く帰つて勉強してたほうがいいよ」

「あの……野暮だつたら『メン』ね。もしかして、丁度のお兄ちゃんのこと？」

「知ってるの？」

「あたしの兄貴が、同級生なんだ。少しその話、聞いたことあつて」「そう、あたしは小さい頃からお兄ちゃんとお世話になつてたんだ」……そこで会話が途切れました。ヨシコは、それ以上は聞き辛くて、口をつけんてしまつました。あの事件のことは当時、子供心に興味を持つて、兄から色々聞いていました。

暫くしてまた、コウのほうから話し始めました。

「あの、やっぱり、迷惑じやなかつたら、ヨシコも来てくれないかな？」

「え？ でもあたしが……行つていいの？」

「ウン……やっぱり、一緒に来て欲しいって思つたの。勉強の邪魔したら悪いから、断つてもいいけど」

ミシコは暫く考えて、そして頷きました。

「分かった、付き合ひよ」

いつも真面目にお願いされて、断るわけにはこきません。  
一人は立ち上ると、花屋を探して歩き出しました。大通り沿い  
に一軒の小さな花屋があって、そこで赤い花を二三輪ほど買ってい  
きました。

坂を上って、上から湖を一望しました。空には山のような大きい入道雲。今日も湖は、青い空を色濃く映しています。どこまでも底無しのような青。

桟橋の辺りを見ると、そこに誰かがいるのが見えます。その人はしゃがんでお祈りをしているようで、しばらく微動だにせず頭を下げていました。やがて立ち上がり、一度か二度、振り返つたりしてこちらへの坂を上ってきました。

その人はユウたちより何歳も年上のようでした。薄くても綺麗に化粧した髪の長い女性で、凛とした落ち着いた佇まいの美しい人で、ちょうどずれ違う時、ユウたちを見て丁寧に会釈しました。二人もそれに合わせて頭を下げました。

「すつごい美人じゃない？ 誰だらう」

女性が行つてしまつて、ヨシコがため息混じりに言いました。  
「あのお兄ちゃんと同じくらいの歳の人だよね、友達かな」

ユウは下げる持つっていた花束を、胸元へと持つていきました。言い知れぬ恐ろしさを感じ始めました。あの人があ……お兄ちゃんの親しい人なのか、好きな人か、あるいはもしかして単に身内だとか。どちらにしても、あの人表情、あの人姿、それらがフラッシュのように光るように、ユウの頭の中に何度も光つて、意識に深く焼きついてきます。

「ユウ、あたしはここで待つてるから  
ヨシコが優しく微笑んで頷きました。ユウも頷き返し、静々と坂を下りていきました。

その様子を、ヨシコはガードレールにもたれて眺めていました。彼女は桟橋の手前で一度頭を下げて、そこで立ち止まりました。し

かし、しばらく迷った様子の後、意を決したようです、その先の桟橋の上へと足をのせました。そして、桟橋の先端で、またお辞儀をして、腰を下ろして花を、湖の中へ流しました。そのまままたお辞儀を……。

「ハヤカワッ」

後ろから声がして、ヨシコは振り返りました。それは、隣のクラスのタカシでした。昨年の一年生の時に、ヨシコとタカシは同じクラスで、お互いウマが合って、よく遊んだり勉強を教え合つたりしていました。

「何してんの？」

「友達の付き合い……ちょっとね」

そしてユウを見ました。

「ああ、そういうことで事故があつたつて」

「あの子の知り合いのお兄さんだつて」

「フウン……」

タカシもガードレールに肘をかけてユウを見つめました。

やがて彼女は全てを終えて、また立ち上がり頭を下げて、こちらに戻つてきました。坂の途中で、タカシの存在に気づいて、少しあシコに目配せをしながら、彼女の側に立ちました。

「隣のクラスのタカシだよ。あ、そうだ！」

アシコはタカシを指して叫びました。

「ユウ、コイツに教えてもらいなよ、数学」

ハ？ と怪訝な顔を浮かべたのはユウとタカシ。

「さつきの話。タカシは数学メチャメチャ得意だから、計算すんごい速いよ」

「ああ……」

「……何？」

タカシがアシコに伺いを立てました。

「あ……突然ゴメン」、アシコは申し訳なさげに頭を搔きました。

「あつ……と、とりあえず紹介したほうがいいかな。タカシにはユウのこともう教えたから……、ユウ、コイツはタカシつていつて、去年の一年生の時に同じクラスだったんだけど、数学がチョーっこいの。前のクラスでは『デカルト』って言われてたっけ」

と言つて、アシコは下品な引きつった笑い声を立てました。

「うわー、そのあだ名を言うな！ やつと忘れかけてたのに」

「実際、目鼻立ち似てんのよね～ピッタリだと思わない？ このHラソーナ顔立ち！」

「ほりが深いだけだ！ つていうかデカルトに失礼だろツ」

「なに言つてるのよ、デカルトは実際に偉い人じやない。アンタは顔ばつかし立派なだけ、ウハ～」

「ていうかあだ名言い出したのも、よく使つたのもお前ばっかりなツ。でも何人かが本気にして使われて、迷惑だよ」

「大丈夫だよ、褒め言葉だから、一応。あ……」

そこで、ミシコは気がつきました。コウが片手にノブシを作つて、それを口元に当たっている姿に。

「ハツハツハ～、こりやこりや、凄いわ！」

唐突にヨシコが大声で笑い出しました。

「凄いって、お前の頭の中が？」

タカシの憎まれ口に、ミシコは何故か平然といつ答えました。

「ウン」

「夏の暑さでイカレたか……」

「とりあえずや、三人で図書館に行こつよ。三人で少し勉強しない？」

「ハツ？」

「ねえ、コウはどう？」

「あ、うん……」

「よし、行こうよ。ね、タカシは国語苦手でしょ。コウは国語メチャ得意だから、かわりにコウは数学苦手だから、チヨツと一緒に教え合えばちようど良いじゃん」

「いやまあ……やうかもしれないけど、強引だなオマエ。えっと、コウ……さん」

「あ……ハイ」

「脳ミソ蒸発してしまったらしいヨシコさん、あんな」と言つてますけど……どうします？」

二人の背後でヨシコが何か奇声を発します。

「ハイ……あたしはよくヨシコと一緒に勉強してますから。それより……」

「俺？　いや構わないけど」

「あ、じゃあ……」

「図書館でやるつよー」、ミシコが強引に会話に入り込んで言いました。

「そだね。俺、じゃあ一回家に帰るよ、教科書とかノート持つてくれるから」

「ウン」

「じゃあ図書館で集合つい形で、あたしとコウサクのまま行くから」

「ああ」

「歴史面倒臭え死んだ人のことなんかどうでもいいしつ」

「ちょっとタカシ、アンタ馬鹿過ぎ。コウに教えてもらいたいな」

「やつぱい、チヨー計算力カンペキ」

「眠い……現国はともかく古文とか役に立つかなあ~」

「あつはつは~、やつぱ英語はサイコー。もっと勉強してタカシに英語で（悪口）言つてやる。理解できなくて一重に馬鹿。アンタ英語ちやんと勉強しないと外国人に馬鹿にされるよ、『日本人は英語出来ないくせに横文字好きだ』って」

「あ~、ちょっと忙しいからコウに聞きなよ」

「お、おッ、オツ！ マジヤバイ……パークエクト……」

一人の声だけが、静かな図書館によく響いていました。

「じゃあね~」

夕刻、三人は手を振つて、図書館の前で別れました。

## 12・鎌びついていた鍵

それ以来、三人はよく集まって勉強するようになりました。大体はヨシコがユウを連れて、タカシを図書館に呼んで、集まつていました。（タカシは学校の講習を取つていませんでした）。

最初の図書館以来ですが、特にユウがとても真剣に、タカシに色々な数学の問題を聞いていました。実際、タカシは人に教えるのがとても上手で、授業中の先生の説明で分からなかつたことが、タカシの論理立つた説明でたちまち理解出来るのが、ユウには凄く樂しかつたのです。

もう夏休みの終わりに近い日、その日ヨシコは都合で来れないということで、一人で集まつて図書館に行きました。

「じゃあこの参考書の最後のページについての実力テスト、「コレ一緒にやるいよ。で、一緒に答え合わせしようか」

「え……数学だから勝てないよ」

「勝負勝負」

そして時間を見て、同時にテストを始めました。

数十分後。答え合わせ。思わず叫び合つた声。

「凄いね、全問正解だね。最終問題なんてあたし全然分かんなかつた……」

「コレはラッキーだよ、この前の塾でほとんどソックリの問題解いたんだ。コレ難しいよね～最初は全然分からなかつた」

「どうやつて解ぐの？ あたしはこの点とこの点を繋いで……」

「あー惜しいね、ほとんどそれで正解。あとはここを……」

二人は真剣に言い合いました。何しろ、ユウは数日後に、夏期講習の総まとめのテストがあり、この成績如何で、志望校をどうするか等をはかるため、非常に大事な意味を持っているのです。図書館の閉館の放送が鳴るまで、二人は机にかじりついて勉強していました

た。

結局、最後は司書の人に言われるギリギリまで、集中して勉強していました。特にタカシが、どうしても解けない問題に四苦八苦して、悔しそうに歯ぎしりしてまで必死に解こうとしていたので、放送が鳴つてもユウはジッと待つてあげたのですが、ついに司書さんの「もう閉館しますので……」の一言で、半ば追い出される形にして外に出ました。

「あ～分かんなかった。あ～悔しい……」

「また明日、一緒に参考書とかで調べてみようよ！」

「ウン、そうだね。……アツ！」

「どうしたの？」

「あ～……クソ、あの司書宣め」

タカシは鞄の中を覗き、まさぐつて、悪態気に舌打ちをしました。  
「参考書忘れた～、慌てて片付けたからなあ……図書館の本と混ぜて置きつ放しかも」

「今すぐ取りに行けば間に合ひうと思つよ。あたし、行つてこようか」「ああ、自分で行つてくるよ。あ、じゃあもひっこで分かれようか」

「あ、あの……」

「ん？」

「この近くに美味しいケー キ屋さんがあるんだけど……良かつたらあの……食べに行かないかなって……思つて……あの……夏休み中、色々勉強教えてもらつたし……その……凄く美味しいんだよその店……その……もし時間があつたら……あの……その……」「行く行くッ、俺甘いのスゲー好きだからッ、ちよつと待つててッ、すぐ取つてしまーす！」

タカシは妙に浮かれた調子で、即座にそう答えて、凄い勢いで図書館の中へと入つていきました。

ユウは詰まつた喉に息をゅつくりと入れていつて、震えている膝

に手を当てました。

思い出してみれば、あのお兄ちゃんの死後、それは無意識の内だつたのか、小学校の時も、中学に上がつてからも、男の子と遊ぶことはおろか、クラスメイトと話することもあまりありませんでした。口数 자체が減つてしまつて、いつも机に座つてノートを開いて勉強しているか、図書館で一人本を読んでいるか、学校ではいつもそんな調子でした。

その中に、ヨシコが入つてきて、少し変わり始めたようでした。彼女はユウに氣さくに話しかけてきました。色々面白そうな店を教えては、そこへ連れて行つたり、勿論勉強も一緒にしたり。ヨシコはユウとは違つて……むしろ反対に、沢山の友達がいました。彼女が部活で、バスケットボール部の部員だったこともあるでしょう。他のクラスにも沢山の知り合いや友達がいて、学年の中でも彼女の存在は少し有名なほどでした。ユウは、その内の一人として、誰にでも仲良くしていたのかもしれません。しかし、それでもユウに大きな影響を与えました。彼女が普段は口を塞いで飲み込んでいること……お兄ちゃんのこともそうですし……好きな本や音楽のこと……思つてゐる気持ちを唯一伝えていた友達でした。ヨシコはどんな話も、まじめに、真つ直ぐこちらを見て聞いてくれました。唯一の、安心して“心の会話”の出来る人だといえました。

それがまた一人、タカシのことも、その内の中に増えるかもしれない感じました。誘いの言葉は、最初の、入り口の勇気でした。そこからがスタートでした。数年前の夏以来、気持ちが塞ぎ込むうちに、何に対しても引っ込み思案になつてしまつた彼女の、ようやく開きかけた扉でした。

やがてタカシは駆け足で、出口の自動ドアを出きました。

「タカシくん」

そういうえば、この時にユウは初めて彼の名前を呼んだかもしれません。それまでは「あの」とか「ねえ」とか言って、彼の肩を叩いて

て話しかけていました。

「お待たせ～」

妙に軽い調子で返事すると、そのまま先頭に立つヨウヒー歩前に出て、前に指差し言いました。

「さ、早く行こうか」

「ウン」

といつても店の場所はユウが知っているので、彼女が先に立つて、歩いていきました。図書館の前の寂しい田舎道を通り過ぎて、左右に広がる煙の道を越すと、車の通りの多い道路に出ました。そこから道沿いに、数分歩いたところにお店はありました。

その間、タカシが取ってきた参考書を両手に開いて、睨むようにまた考えていました。ユウもそれに加わるように、後ろの方から少し遠慮気味に目を向けると、気付いたタカシが彼女に見易いように横にずらしてあげました。

また二人は目の前の問題にのめり込んでしまって、視線が手元に釘付けに……信号の前で立ち止まって、その時、横から走ってきたトラックのクラクションの音に、ユウの意識がハツと戻り、気付きました。

「ご……ゴメンナサイ……通り過ぎてた……」

ユウは顔を真っ赤に、俯いて言いました。

### 13・図書館でいつも勉強会

やがて夏休みが過ぎ、九月から学校が始まり、再び授業授業の日々。

二人の心は次第に、自然と近くなつていったようでした。それはユウが親しげに、タカシに話しかける様子からして明らかでした。そのきっかけは、ほとんど勉強に関するのですが、何度も彼のもとに通い詰めていました。放課後になつて、彼のクラスの前に行つて、出てくるのを待つて、声を掛けました。

「タカシくん」

「よ、じゃあ図書館行こつか」

そして学校を出ます。学校にも図書館がありますが、町の図書館の方が少し長く開館しているので、いつもそちらで勉強していました。

ユウは、教科書片手に頭を抱えているタカシに、優しく笑みを浮かべて言いました。

「国語が得意になるんだつたら、やっぱり本を沢山読むのが一番いいよ。教科書の問題とかのは読み難かつたりするから、もつと読みやすい……ライトノベルとか、童話とか、そういうのを読むの。文章を読むことに慣れてくると、教科書の文章でも楽に読めるようになるとと思うよ」

「童話ね……」

「富沢賢治とか良いと思うよ。有名だけど『銀河鉄道の夜』とか、読みやすい話だけど、実は結構深かつたりするし」

「ああ、確か家の本棚にあつたかも……うん、読んでみるよ」

「ウン」

そして彼女は満足そうに目を細めて微笑んでした。

彼女は随分、笑うようになりました。タカシの前では、今も、そ

して学校でも。それは、ヨシコのように大口を開けて豪快に笑うものでは決して無く、表情に薄くかすかに浮かぶほどの優いものでしたが、しかし、そんな優しい綺麗な笑みを、それまでタカシは勿論のこと、クラスメイトや周りの人も、全く見たことがありませんでした。その変化が、タカシに嬉しくないはずがありませんでした。

「そういうやさツ、アレ読んだツ？ 根下先生の新刊ツ！」

タカシは無類の漫画好きでした。週刊雑誌は出ているもの全てを買っていて、ほとんど毎日、朝必ずお店に寄つて買っていき、学校に持つて行っていました。今日は雑誌と共に、人気漫画家の根下先生の新刊を買つていたのでした。タカシは嬉しそうに、足元の鞄から、紙袋に包まれた本を取り出しました。もう口は開かれていて、本を出すとコウの前でページを開いて、ペラペラとめくつて見せました。

「すつ」「よねこの先生、少年誌でここまで描くなんて……グロ過ぎ。」「レンなんか、もうキャラが人間の原形とどめてないし」

「『タ……タ～カ～シ～ク～ン……マナビタマヘッ、ベンガクシタマヘッ、ウヤマイタマヘッ……』」

「うわッ、びっくりした。それってひょっとして、定義先生の真似？」

定義先生とは、根下先生の漫画に出てくる、主人公のクラスの教師のことでした。

「ウ……ウン……そう……一応……」

「似てた似てた！ アニメの方のマネでしょー？ 特にお決まりの最後の三つの台詞の吐き捨て加減！ ……けど、定義先生はそんなつまつたりしないけどね～」

「ウ……恥ずかしくつて……」

「でも……実は家で結構練習してたでしょ？」

「ウン……あたし、定義先生の台詞だったらほとんど言えるよ。あたしもこの漫画大好きだから。実はアニメは全部録画して、ためてたりするんだ」

「マジで！見に行つてもいい！？ 実は先週のを見逃しててさ～」

「ウン、モチロン。いいよ」

「やつたラッキ……レンタルしないで済んだ。ちなみに……今日と

か……大丈夫？」

「ウ、ウン。大丈夫、ダイジヨウブ」

「やつたあ……そうと決まつたら、仕上げの勉強、一気にやつちゃ

おうよ。気になつてしかたがね～ッ」

そして一人は、タカシの買つた英語の問題集の、ページの後ろについていた小テストを、図書館のコピー機でコピーして、一緒に始めました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4069c/>

---

青空の下に

2010年10月10日21時30分発行